ARCHITECT

NO.296

2013. 5. MAY.

CONTENTS

自作自演169 ……高田雅司・藤巻志伸・宮坂英司・久安典之 …… 2
第４回　これからの都市計画とまちづくりを考える
減災の視点から見直す都市計画 ……村山顕人 …… 4
新連載　木とながくつきあう
日本人と木材 ……石山央樹 …… 6
JIA静岡発　JIAコンペの最優秀案 掛川教会、7月末の竣工に向けて工事進行中 …… 8
JIA愛知発　青年委員会トーク&トーク「変わる家族と変わる住まい」第2弾…柳澤　力 …… 9
JIA愛知発　見学会「駒屋」復原改修工事と二川宿を見る ……山本敏彦 ……10
JIA三重発　建材研修会 鉄筋コンクリートの補修、劣化、保護を学ぶ　西出　章 ……11
JIA全国支部長会議開催　伊豆長岡 三養荘にて ……鳥居久保 ……12
Bulletin Board ……13
JIAリフレッシュセミナーに参加して　… 村松　篤・竹中アシュ・平野恵津泰 ……14
▶東北からのメッセージ
岩手三陸被災地の現状と活動 ……六本木久志 ……16
福島を訪れて ……川口亜稀子 ……17
会員のステージ
「墨会館の価値と見所」講演会・見学会・展覧会 ……谷　進 ……18
名古屋大学大学院教授 谷口元さんの最終講義を聞いて ……谷村　茂 ……19
保存情報138　蟹江の古民家・黒川邸 ……國分孝雄 ……20
　　蝮ヶ池八幡宮 ……谷村　茂 ……20
理事会レポート ……小田義彦 ……21
東海支部役員会報告 ……尾林孝雄 ……22
東海とっておきガイド㊹　静岡編 ……鈴木　武 ……23
地域会だより ……23
賛助会通信⑥三興商事㈱ ……嶋尻行雅 ……24
編集後記 ……西川光広・前田佐智男 ……24

映画の中の建築 ❷

武蔵と三十三間堂

宮本武蔵のイメージは吉川英治の小説によって定着したと言ってよい。戦後、戦意を高揚したなどと批判する人もあったと聞くが、今改めて読み直してもこれは男の永遠の青春物語だ。

武蔵と吉岡伝七郎の決闘は慶長期のある冬の日、三十三間堂（蓮華王院）の境内で行われたらしい。映画「宮本武蔵　一乗寺の決斗」（1964年、監督内田吐夢、脚本鈴木尚之、主演中村錦之助）はその闘いを三十三間堂の裏手で描いている。その方が長大なスケール感がよく刻まれているし、安置されている千体の仏像に背を向けて戦う方が納まりがいい。錦之助武蔵は暗闇の中、堂の角からスーッと現われ、縁の上を歩を進め伝七郎を見下す形となる。すでに試合優位である。武蔵の剣の極意は「間合を見切る」ということだ。間合を詰めていくという緊張感に規則正しい柱間を見せる三十三間堂ほど似合いの背景はない。

そして映画はこの後、黒澤明監督「七人の侍」と並んで時代劇の白眉とされる一乗寺下がり松での武蔵対吉岡一門73人の壮絶、悲壮なシーンに繋がっていく。

光崎敏正｜愛知地域会

05_アーキテクト.indd　1　　13.4.19　5:07:15 PM

自作自演⑯⑨

高田　雅司（JIA静岡）

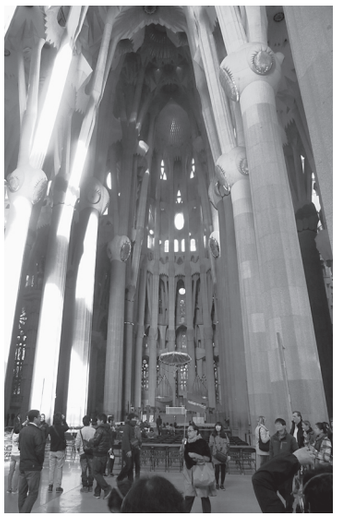
針谷建築事務所（静岡市駿河区小黒3-6-9　TEL 054-281-1155　FAX 054-282-5502）

バルセロナを訪ねて

3月初め、バルセロナに行ってまいりました。21年ぶりのガウディ作品などとの再会です。6日間、正味3日間と短くハードな滞在・視察でしたが、大変刺激的で楽しい旅でした。

ガウディはサグラダ・ファミリア、カサ・ミラ、カサ・バトリョ、カサ・カルベット、コロニア・グエル礼拝堂、グエル公園など。ミースのバルセロナ・パビリオン、ルイス・ドメニクのカタルーニャ音楽堂、サン・パウ病院、伊東豊雄さんの作品もいくつか観てまいりました。特にサグラダ・ファミリアは随分と変貌（できて）しており、21年前とは隔世の感がありました。当時は「生誕の門」と「受難の門」と地下部分しかできておらず、大聖堂部は何もない作業スペースでしたが、訪れた大聖堂の空間はダイナミックで大変明るく、これまでのゴシックを主とした教会建築のイメージを大きく変えるものでした。工法も時代に即し進化し、工期も随分と短縮され、ガウディの没後100年の2026年には完成とのこと。ぜひ完成後も訪れてみたいものです。

それにしても、こういう歴史ある街に近代建築を挿入することの難しさ、陳腐さ、勇気。どんなデザインをしても浮いてしまいます。そんなことを感じ帰ってまいりました。



サグラダ・ファミリアの大聖堂内部

藤巻　志伸（JIA愛知）

藤巻建築設計事務所（名古屋市昭和区村雲町28-5　TEL/FAX 052-882-8402）

フライフィッシング

この原稿が皆さんに読まれる頃はゴールデンウイークの真っ只中でフライフィッシングもベストシーズンを迎えています。フライフィッシングとは鳥の羽などを使って水棲昆虫を模した毛鉤を作り、その毛鉤で魚をだまして釣り上げるとてもシンプルな魚釣りです。フライフィッシングで私が釣りの対象とする魚は比較的冷水域に棲むイワナ、アマゴ、ヤマメで、必然的に釣行先は山間の谷になります。

日本には数多くの河川がありますが、その河川のほとんどが地元の漁協に管理され、魚資源を守るため特定の魚種には禁漁期間が設けられているということは意外に知られていません。したがって釣り人はどんな山奥であっても、決められた期間にあらかじめ1,000円程度の遊魚証なるものを買うか、現地で監視員のおじさんにお金を払うかして魚釣りに挑みます。

街で桜の花も散り、山間に山吹の黄色い花が咲き誇る頃、一斉に水棲昆虫の羽化が始まります。水中の魚たちは羽化寸前のあるいは羽化直後の虫を捕食しようと水面を意識しています。そこへ自分の作った毛鉤をうまく流してやると、まんまとだまされた魚が食いつくというわけです。

今、今年の連休の釣行先を検討しているところです。はたして釣果はどんなでしょうか。

夏、長野にて

つややかな背を見せるイワナ

05_アーキテクト.indd　2　　13.4.19　5:07:17 PM

宮坂　英司（JIA愛知）

アトリエ創（一宮市木曽川町玉ノ井四ッ辻西１　TEL 0586-84-3551　FAX 0586-84-3552）

スキー再開！

レストランからゲレンデを見る

今年、本当に久方ぶりにスキーを再開しました。こどもが小さい頃は、家族で北海道のニセコ、キロロや、山形の蔵王、新潟の苗場など、シーズンごとにいろいろ出掛けていたのですが、仕事が忙しくなったり、こどもも一緒に行きたがらなくなったりと、ここ数年（10年近く？）はスキーから遠のいてしまっていました。今シーズンも行くことはあまり考えていなかったのですが、岐阜県内のスキー場のリフト券の優待を頂いたのをきっかけに、久々に行ってみようかと思い、今シーズンは2回、スキーに行くことができました。

20代の頃は、仕事を終えて夜中に車を走らせ、日帰りで遠方のスキー場に行っては、日頃のストレス発散とばかりに1日中滑っていたのを思い起こします。30代になると子育てもあり、仕事も多忙になりと、わざわざ休んでまでスキーに行くことができなくなってしまって、持っていたスキー板もだんだん劣化してしまい、そうなると行く気持ちもなえてしまったりと、いわば悪循環でした。

昨年から体のことを考えて運動するようにしている私としては、スキーもその一環ととらえることができますし、また、週に1日は最低でも休むことを心がけている今は、逆に一挙両得。スキーはとてもよい気分転換になりました。久しぶりの雪道。リフト、ゲレンデの雪の感触と空気感。頂からの山々の眺めは、20代の頃の気分を復活させてくれました。

これをきっかけに新しい板も購入！　また来シーズンも何度かゲレンデに行くことになりそうです！（笑）

久安　典之（JIA三重）

久安典之建築研究所（四日市市諏訪栄町22-3　TEL　059-359-6678　FAX 059-359-6679）

まちづくり百面相

建築家としての仕事以外に、多くのまちづくり活動にかかわっています。

地域の文化拠点をネットワーク化する「四日市地域まちかど博物館推進委員会（代表）」、ウミガメが産卵に来る海岸で月に一度の早朝清掃とイベントをする「四日市ウミガメ保存会（会長代行）」、居住する地区の「四日市市楠地区まちづくり協議会（街のうるおい部会長）」、事務所のある商店街の「三番街発展会（会長）」や「四日市諏訪西商店街振興組合（理事）」、事務所裏の神社の活性化を企画する「諏訪神社にこにこプロジェクト（共同発起人）」など。

それぞれの活動の中では建築家というのは裏の顔であり、その姿を全く知らない方もいたりします。そんな状況に身を置きながらも、意外にも自分自身の建築家的な資質に気付かされます。構想し、計画し、実現するというプロセスはどんな活動にとっても必要ですが、我々にとっては通常の仕事で行っている企画・設計・監理というあたりまえの手順であり、それほどストレスなく事を運ぶことができます。そのせいか、知らず知らずのうちに責任ある役回りを期待されます。

自分の身の回りの環境を少しでも良くしたいという想いからこれらの活動をしていますが、自身の得手とすることで役目を果たしながら多くの方と楽しくまちづくりの取り組みができることはとてもありがたく、ふとした瞬間に豊かな人生を送らせていただいていると実感することがあります。

今では“趣味は？”と聞かれると、“まちづくりです！”と答えています。同時に、趣味に没頭して仕事がおろそかにならないように肝に銘じています。

05_アーキテクト.indd　3　　13.4.19　5:07:17 PM

これからの都市計画とまちづくりを考える ❹

減災の視点から見直す都市計画

村山顕人 ― 名古屋大学大学院環境学研究科　准教授

東日本大震災から学ぶこと

東日本大震災による宮城県仙台市および名取市を中心とする仙塩広域都市計画区域の津波被害の範囲は、概ね仙台東部道路よりも海側でした。その大部分は都市計画法で指定される市街化調整区域（市街化を抑制すべき区域）で、農業振興地域の整備に関する法律による農用地区域も広範囲に指定されているため、津波被害を受けたのは農地と旧来からの集落が中心です。市街化調整区域内の旧来の集落に隣接して整備された新しい住宅地でも壊滅的な被害を受けたところがありました。もし仙台市の市街地拡大が仙台東部道路を超えて海側まで及んでいたら、津波被害はより大きかったでしょう。また、こうした津波被害のほかに、市街化区域では、盛土造成地における家屋の倒壊と道路の変状、土地の液状化による家屋の傾きと都市基盤の破損といった被害がありました。

ここで改めて学ぶべきことは、土地利用規制はその土地が持つさまざまなハザードに応じてきめ細かく設定されるべきことでしょう。東海地方の自治体でも、想定される南海トラフ巨大地震による震度や液状化危険度、土砂被害危険箇所、津波被害のほか、台風や集中豪雨による外水氾濫や内水氾濫にかかわる各種ハザードマップが公開されています。ハザードマップは、個人が自宅の災害危険度を理解して可能な範囲で対策を講じることには貢献していると思いますが、都市計画・まちづくりの現場できめ細かな土地利用計画や施設整備計画を検討する際に十分に活用されているとは言えません。実際、災害危険度の高い地域でも市街化が進み、そこに多くの人々が生活しています。

進行性リスクと突発性リスクに備える都市計画

本連載の第１回では、都市基盤の整備や維持、修復に必要なコストを可能な限り削減し、環境問題の緩和と超高齢社会への対応に向けて都市構造を再編するために、公共交通機関をはじめとする都市基盤が整備され、かつ、災害危険度の低い適切な場所に都市の諸機能を誘導する必要があることを述べました。東日本大震災前は、生産年齢人口減少、高齢者激増、経済停滞、格差社会の顕在化、財政難、環境問題の深刻化といった進行性リスクに対して、現在の拡大・拡散した都市構造をこれからも維持するのは困難だろうとの認識の下、「集約型都市構造」を目指すことが議論されていました。大震災後は、それに加え、南海トラフ巨大地震到来の突発性リスクへの対応が議論されています。短期的には、命を守るために建築物・土木施設の耐震化、避難所・避難地・津波避難ビル・避難路の確保、仮設住宅建設場所・みなし仮設住宅の確保、緊急対応・復旧を支える道路・公園の整備などの施策を、中長期的には、命と生活と資産を守るために災害リスクを想定した土地利用誘導、つまり災害危険度の高い市街地の改善、低密度化、部分的撤退などの施策を展開する必要があります。これは、従来から議論されていた「集約型都市構造」の強化をよりすばやく徹底的に進めることにほかなりません。

都市計画見直しの具体例

伊勢湾に面するＡ市の沿岸部の市街地の一部は、良好な環境の低層住宅地を形成するため、10mの建物高さ制限がある第１種低層住居専用地域に指定されています。しかし、最大級の南海トラフ巨大地震が発生した場合、この市街地では津波による数メートルの浸水被害が発生すると想定されています。例えば、この市街地で1階駐車場、2階以上住居の戸建

写真１　Ｂ市の軟弱地盤の海抜ゼロメートル地帯

05_アーキテクト.indd　4　　13.4.19　5:58:10 PM

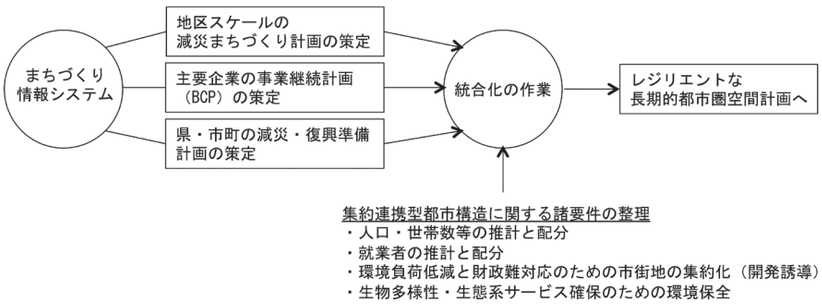


図１　中京圏の空間計画を検討する枠組み

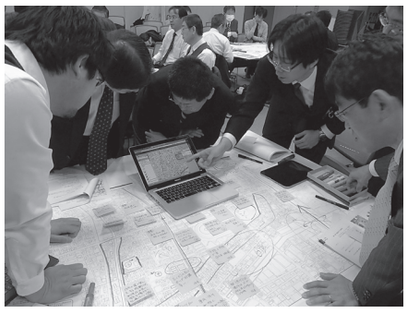


写真３　まちづくり情報システムを利用した地区スケールの減災まちづくり計画の検討

住宅または集合住宅を津波に強い鉄筋コンクリートで建てようとした場合、10mの建物高さ制限が邪魔になります。また、経済的に余裕のある住民がより安全な市街地に自ら移住することにより、人口や世帯数が減少することも考えられます。この市街地の将来像をどうイメージして、建物高さ制限の緩和をはじめとする浸水被害軽減のための都市計画にどう変更するのかが議論になります。

B市の大部分では、軟弱地盤の海抜ゼロメートル地帯であるため、巨大地震が発生すると広範囲にわたって河川堤防の決壊による浸水と土地の液状化が想定されます（写真１）。まずは、これまで許容してきた災害危険度の高い地域の市街化を止めなければなりません。そして、相対的に災害危険度が低いにもかかわらず空洞化している中心市街地を再生し、多くの市民が相対的に安全で、巨大地震が発生しても集中的に復旧・復興が進む中心市街地に暮らすことができる状況をつくるのが望ましいと思います。

C市では海と山で囲まれた狭い市街地に多くの人々が住んでいますが、その大部分に津波被害が想定されています（写真２）。一部の若年世代はすでに山の高台に造成された住宅地に家を建てており、高台移転が始まっています。

写真２　海と山で囲まれたC市の市街地

これらの具体例は、ようやく議論が始まった段階です。長期未整備都市計画道路や公園・緑地の見直しもそうですが、都市計画の見直しは過去の計画を一部否定することでもあり、きちんとした根拠に基づく慎重な検討が求められます。国（国土交通省中部地方整備局）の検討会で作成している「地震・津波災害に強いまちづくりガイドライン」や愛知県の「東海地震・東南海地震・南海地震等被害予測調査」の検討結果、地域の住民・地権者・事業者などからの要望や提案、後述する研究成果をフル活用した市町村における丁寧な都市計画の仕事が求められます。

減災都市計画・まちづくりの研究

私自身は、国・県・市の各種検討に専門家として参加しながら、名古屋大学減災連携研究センターのメンバーと一緒に、「長期的な視点からのレジリエントな都市圏創造に関する研究」を開始しました。「レジリエント（resilient）」とは、「すぐに立ち直れる」「回復力のある」という意味です。図１の通り、進行性リスクに対応する「集約型都市構造」の実現を基礎に、減災対策と復興準備の視点を加えて、2060年に向けた中京圏の空間計画（土地利用計画・施設配置計画）の骨格を検討しています。このうち、「まちづくり情報システム」を利用した「地区スケールの減災まちづくり計画の策定」については、産官学民連携の「減災まちづくり研究会」（事務局：名古屋都市センター）での2年間の検討を経て（写真３）、3月22日のシンポジウムでその成果が公開されたところです。土地利用や建物の現状、人口・世帯数の現状と将来推計、想定される南海トラフ巨大地震による震度や液状化危険度、土砂被害危険箇所、津波被害のほか、台風や集中豪雨による外水氾濫や内水氾濫にかかわる各種ハザードなどの情報を地理情報システムを活用して重ねて表示し、住民・地権者・事業者などの多様な主体の協働で地区の減災対策と復興準備を考え、実現していく取り組みです。こうした取り組みには、建築・都市計画の専門家の参加が必須です。

むらやま・あきと｜名古屋大学大学院環境学研究科都市環境学専攻・准教授（工学部環境土木・建築学科／減災連携研究センター兼務）。1977年生まれ。2004年東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了、博士（工学）。東京大学国際都市再生研究センター特任研究員を経て、2006年10月から名古屋大学に在籍。専門は都市計画・まちづくり。2004年日本都市計画学会論文奨励賞受賞。共著に『世界のSSD100：都市持続再生のツボ』（彰国社）、『都市のデザインマネジメント：アメリカの都市を再編する新しい公共体』（学芸出版社）など

◉次回は７月号掲載です。

05_アーキテクト.indd　5　　13.4.19　5:58:12 PM

木となかく つきあう❶

日本人と木材

石山央樹・中部大学工学部建築学科 講師

写真１　オーストリアの宿の柵

写真２　日本の公園の遊歩道

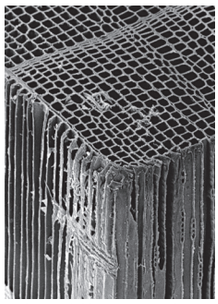


写真３　木材はストロー束

上の左2枚の写真を見比べていただきたい。何か気づいていただけただろうか。筆者はこれらを目にしたとき、なんとも残念な気持ちになったのである。左端はヨーロッパ、オーストリアの田舎町の宿の柵（写真１）、となりは日本のある公園の遊歩道の柵（写真２）。お気づきのように、オーストリアのものは打ち込んだ杭の木口は斜め切りした上、木板を打ち付けている。一方、日本のものは木口を水平切りしたのみで雨ざらしになっている。

木は方向によって性質が異なる

木材はストローを束ねたような構造である（写真３）。この構造が、木材に直交異方性という重要な性質を与えている。力学的には、繊維方向には強く、直交方向には弱いといった具合である。例えばスギの場合、繊維方向の引張強度は約57N/mm^2、半径方向の引張強度は約7N/mm^2、半径方向の引張強度は約2.6N/mm^{2}といった具合に、繊維方向は直交方向の約15～20倍の強度がある。木材は繊維方向に長い軸材料として使用されるのが一般的であるので、力学上の直交異方性はほとんど意識されずに合理的な使い方がなされているようである。

この直交異方性は力学的性質だけではなく、膨潤・収縮や水分の浸透速度にも当てはまる。例えば膨潤・収縮の度合いは、繊維方向：半径方向：接線方向では概ね0.5：5：10と言われている。心持ち材*1の背割りはこの性質による材の割れの影響を小さくするための知恵である。また、集成材を構成するラミナ*2は木表と木裏が接するように貼り合わせるのが一般的である（写真４）。これもまた直交異方性による材の狂いを極力抑えようとする工夫である。また、立木の状態では水分の伝達経路であった針葉樹の仮道管や広葉樹の道管が繊維方向に通っていることから容易に想像できるように、木材は繊維方向には水分を通しやすい構造である。このことは上の写真からも容易に想像できるだろう。ちなみに、辺材の水透過性は、繊維方向では接線方向の5000～5000万倍に達すると言われている。

木材は水分が多い状態で腐り、食われる

木材を建築材料として使用する上で最も大きな敵は腐朽菌とシロアリであることは論を待たないであろう。木材は繊維飽和点（含水率25～35%）以上で腐朽が起こり、シロアリもまたその活動には水分を必要とする。逆に言えば、腐朽やシロアリ被害を抑えるための第一歩は、木材の含水率が低い状態を維持することである。

前述した木材の直交異方性を併せて考えれば、木材を屋外で使用するときに最も注意すべき点は、木口からの水分の侵入をいかに抑えるか、ということである。また、木口ではなくとも、できるだけ水分の浸透を抑えるために、水分を滞留させない工夫が必要であることは言うまでもない。

日本人は木が好きか？

日本人は木が好き、とはよく言われるフレーズである。しかしながら、好きというほど

05_アーキテクト.indd　6　　13.4.19　5:07:20 PM

写真４　木表と木裏を貼り合わせる

写真５　オーストリアの個人住宅

写真６　オーストリアの住宅の外壁

写真７　錦帯橋の橋脚の木組み

上手に木を使っているだろうか。冒頭に挙げた写真をいま一度ご覧いただきたい。**写真１**は、宿の主人がDIYでつくったのかもしれない。別の個人住宅でも同様に木口を斜め切りして木口にカバーをするという工夫が見られた（**写真５**）。こちらはとても専門業者が施工したクオリティーとはいいがたく、そのお宅のご主人がDIYでつくった可能性が高い。また、木口カバーをしていない部位も斜め切りし、水分をできるだけ滞留させないようにする工夫が見られる。かたや**写真２**の日本の公園の柵、ここは公共の公園であるので、おそらくは専門業者が施工したのであろう。しかしながら、こちらの杭は木口は水平切りされているのみで、木口カバーもしていない。「好きこそものの上手なれ」となっていないのがまことに残念である。

オーストリアでは、実は他にも木材の使い方に工夫が見られた。外壁に木材を貼りつけるディテールであるが、断面が長方形ではなく平行四辺形にカットされている（**写真６**）。下端が外側に向けて鋭角になっており、これはおそらく水切り性能を向上させ、内側に水分を回り込ませない工夫であろう。さらに、数段ごとに突出部を設け、外壁木材に水分が作用しにくいディテールとなっている。

日本においても、伝統的建築物や構造物においては、特に木材の木口部分に水分を滞留させない工夫が見られる。錦帯橋の橋脚の木組みには、橋脚を貫通した貫の木口部分に屋根状の板と木口カバーが設けられている（**写真７**）。日本においても、少なくとも中世の技術者たちには、木材をながく使うため、木材に水分を滞留させない術が伝承されていたのかもしれない。

失われてしまった知恵

日本の古建築において木材が多用されており、鉄や銅などの金属材料があまり使用されていないのは、単純に木材は身近に大量にあり、鉄や銅は高価であったからであろう。また、大量にあるとは言っても建築資材は貴重なものであり、ながく使う必要があった。高温多湿な日本の気候は森を育み、木を育てる一方、木材にとっては過酷な環境を与える。このため、水分を滞留させないためのさまざまなディテールが工夫されてきたと考えられる。

しかしながら、近年の目覚ましい技術革新により、ディテールによらずとも建材の防水性能で木材を水分から守ることが可能になった。また、さまざまな薬剤の開発により、腐朽やシロアリ被害のリスクは格段に減少している。そのためか、木材に水分を滞留させない工夫、木口はカバーや塗装で保護するなどの他にも、例えば、軒の出を深くするとか、外部で使用する木部天端には傾斜をつけるなどのディテールの知恵が失われつつあるように思われる。

木とながくつきあう

2010年に木材利用促進法が施行され、木材を積極的に利用する機運が高まっている。中高層や大規模木造の実現も始まっている。一方、長期優良住宅に関する取り組みが積極的に行われ、建築物の長期使用のための技術基盤が整備されつつある。このような動きは、失われつつある知恵をもう一度見直すチャンスでもある。

本連載では、古来の知恵や最新の研究成果などをヒントに、木とながくつきあうための方法を考えていきたい。

＊1　樹心を含んでいる材。乾燥すると接線方向の収縮が大きいため、表面に割れを生じやすい。あらかじめ背割りと呼ばれる切込みを入れることにより、他の部分に割れが生じることを防ぐことがある。

＊2　挽き板。厚さ3cm程度のものが多い。樹心から遠い側を木表という。接線方向の収縮が大きいため、乾燥すると木表側に反りやすい。

いしやま・ひろき｜1975年静岡生まれ。1998年東京大学工学部建築学科卒業、2000年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程終了。同年住友林業株式会社入社。2009年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。2010年より九州大学非常勤講師、2012年より中部大学講師。専門は木質構造、木質材料、耐久性、建築構法。博士（工学）、技術士（建設部門）、一級建築士

◉次回は７月号掲載です。

05_アーキテクト.indd　7　　13.4.19　5:07:20 PM

掛川教会、7月末の竣工に向けて工事進行中

一昨年の秋、JIA静岡主催の公開コンペで最優秀賞をいただき、日本基督教団掛川教会教会堂新築工事の設計監理を委託された。設計・見積・公告期間に約1年を費やし、現在、牧師館は上棟し、教会堂は基礎工事、4月中旬に上棟、7月末竣工の予定である。これまで10回以上ワークショップを行い、毎回20～30名の参加者と意見交換を行ってきた。

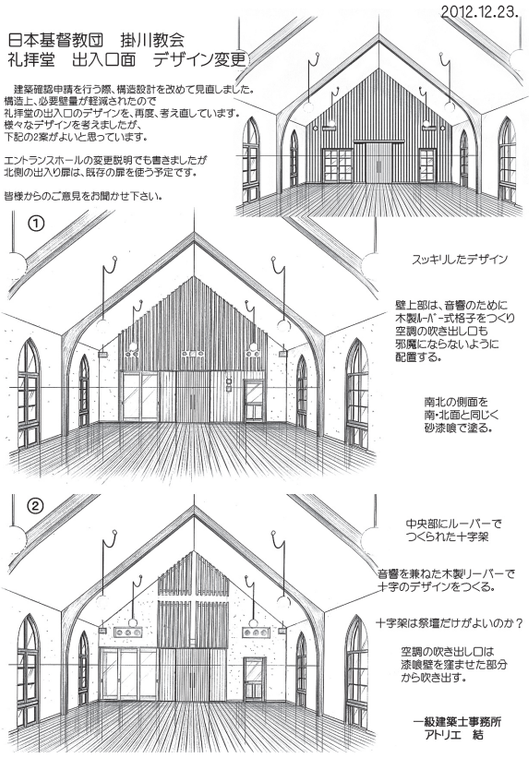
私のコンペ案が教会員の人たちの支持を受けたのは、昭和9年築の元の掛川教会の家庭的で温かく、やさしい空間を受け継いでいる点だった。しかし、小さな教会ゆえ、礼拝堂も集会室も多目的に空間が使われること、50名近い信者の人たちが向かい合って座れることが大切であった。

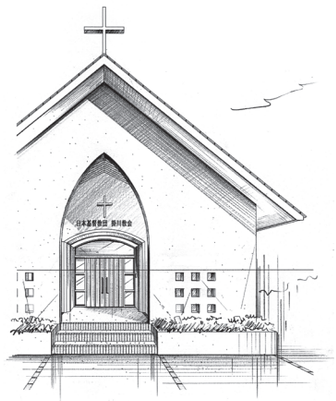
コンペ案は、木造で無垢材を使用した在来軸組工法である。大きな空間にするために木造トラスの架構も多く考えたが、どうしてもやさしくかつ荘厳な礼拝空間にならない。そこで同じ木造でも大空間に対応できる大断面集成材工法を採用した。逆に集成材だからこそできる、湾曲集成材を礼拝堂に使い、掛川教会の皆が愛し続けてきたゴシック風アーチ窓と連動させた。また、元の教会の天井板やレトロな照明ガラスを多目的室に再利用するなど材料を生かすことで、信者の皆さんの教会への愛着を継承している。

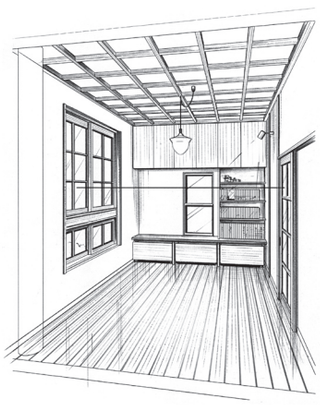
工事監理では、VE提案型を採っている。性能や機能を低下させず、コストダウンを図り、総合的な価値を上げるために理想的な工事監理だが、実際、設計者、施工者の労力は大きい。設計者である私は、施工者からの提案に、ときには自分の設計そのものを否定されるのではないかという危機感を感じながら、それでも建設的に話し合い、「設計主旨」そのものがぶれないように強い信念を持ちながら、仕様変更に伴い、一つひとつの内容を、改めて模型やスケッチでスタディーし、改めて図面化している。施工者も静岡県を代表するような教会にしたいと意気込み、熱く工事に臨んでくれている。

建築の設計にかかわり始めて25年、設計事務所として独立して15年が経った。多くの住宅を設計してきて、住宅に関してはよい設計ができるという自負がある。そんな私だが、掛川教会で改めて建築そのものの「設計」と向き合っている気がする。それは、建築家として自分自身との格闘の日々なのである。

髙島ゆかり｜アトリエ 結







左｜各部のデザイン変更については教会側と何度も図をやりとりした。これは礼拝堂背面のデザイン変更について提案したうちの1枚。この後デザインは再び変更となった
上左｜掛川教会ファサード スケッチ
上右｜多目的室 スケッチ
右｜礼拝堂内観 パース

05_アーキテクト.indd 8　13.4.19 5:07:21 PM

「変わる家族と変わる住まい」第２弾

講師：篠原聡子さん（日本女子大学教授・空間研究所代表）

平成 25 年３月３日（日）、名古屋市中小企業振興会館「吹上ホール」、愛知ゆとりあるすまい推進協議会協賛、参加 73 名（JIA13 名＋一般 60 名）

■はじめに

変わりつつある家族に対応した住まいつくりを一般の方に伝え、多様な家族のニーズに応える建築家の役割を示すことを目的に、女性建築家をお呼びして上記講演会を行いました。場所は「ハウジング＆リフォームあいち2013」（主催：愛知ゆとりある住まい推進協議会他）内の特設会場で、多数の来場者が往来するオープンな会場です。事前予約制ではなく出入り自由な会場とあって、席が埋まるか直前まで不安でしたが、蓋をあけてみれば多くの一般の方々が来場され、途中退席もほとんどなく食い入るように聞いておられました。

■講演概要

鈴木利明会長挨拶の後、篠原先生の講演内容は大きく分けて下記の流れでした。

1：戦後以降の公団などによる集合住宅史
2：現在の日本における家族形態割合
3：韓国／台湾の集合住宅との比較
4：篠原さん設計シェアハウス実作紹介
（※以下、シェアハウス＝SHと表記）

1、2はこのシリーズ企画の前提。詳細報告は省きますが、一般の方々が大学講義風に聞く機会として新鮮だったと思います。

3では、先生の実地調査／研究に基づき我々建築家にとっても勉強になる話でした。日本では戦後のベビーブーム後、1950年前後に出産調整策（1949年優生保護法など。1950～1970年はなんと人口中絶／出生比率が50～70%超の高率！）がとられるのに対し、台湾／韓国では20～30年遅れて出生率の劇的な低下が起こります（ちなみに中国の一人っ子政策は1979年～）。推測では敗戦か勝戦かが影響していて、韓国／台湾では戦後に大家族制が損なわれることはなかったそうです。そのため、１戸あたりの部屋数や面積は日本と比べ断然広く、さらに親戚一同で「集合」している「建物」も多いそうです。台湾／韓国から日本へ来る留学生がまず驚くのは、日本の集合住宅の狭さだとか（講演後、大家族制倒壊は相続税にもよると先輩女性建築家が言っておられました。人口調整含め法制度の影響力は絶大で、逆に過度の少子化が進行しても法が軌道修正できないため悪化を促進、結果として人口減少と独居の増加が止まらない。明治維新後や第２次大戦後、「外」からの力で変化した日本ですが、「内」からの変化は政権交代でも難しいようで）。

4では、設計時のソフト掘り下げはもとより、竣工後リサーチが特筆でした。独居老人向けSHや、風呂便所なし現代版○○荘的オシャレSHに留まらず、営利団体が運営する、企業寮を改造しての高級シェアハウスが大企業に勤める独身の若者に情報交換の場として受けているとの紹介も。さらに、都心部矮小地に数戸のワンルームマンションを依頼されたが、水回り比率の異常さからSHにしましょうと提案し、竣工後は設計担当者が移り住んで実際のルールづくりにかかわっているなど。設計で終わらず問題意識を進め模索し続ける姿勢と、その中でも「内のルールは、外を呼び込むことでできてゆく。お祭りやパーティが重要」との実況中継が、実作品とともに印象的でした。

■OSUと、おもてなし武将隊の衝撃

「Osu Super idol Unit」と言うらしいです。SaKaE以外に大須にもアイドルがいたとは。当方の会場の真横、硬そうな愛知県建築住宅センターさんのブースです。真っ赤なミニスカートの女性アイドル組3人が低炭素化促進法○×クイズをしていて、申し訳ないけど内容に全く感心なさそうなファンらしきオタク君が群がっていました。

特設会場でも、武将隊を待ちわびるファンがその前の住宅賞受賞者セミナーを占拠（席取り）していたとか。幅広い層に建築を偶然にでも知ってもらう方法はいろいろあるんだな、と世の中を感じてしまった瞬間でした。建築界も桂離宮じゃないけど、外から変わるということか。

柳澤　力｜建築計画連合

05_アーキテクト.indd　9　13.4.19　5:07:22 PM

JIA 愛知発　見学会

「駒屋」復原改修工事と二川宿を見る

二川宿のまちなみの一軒

「駒屋」は東海道の宿場町のひとつである二川宿（愛知県豊橋市）の一角にあります。江戸時代の後期に建造され、金融業を営む豪商として栄えました。十数年前より市の所有となり、このたび復原改修されるということで、市の了承の上、復原改修の設計および工事の監修をされている豊橋技術科学大学泉田英雄准教授の協力を得て解体時の見学をさせていただくことになりました。

これは市の事業として、本陣・清明屋（旅籠）の復原改修に引き続き、宿場町として本陣・旅籠・商家の3点セットの最後のひとつとして行われるものです。また、市が二川宿景観形成地区としてまちなみ整備計画を策定し、住民や住民団体に対する支援として整備に関する助成や助言をするなどのまちづくりの環境整備がされつつあるようです。そこで都市計画課に整備計画の概要、経緯、展望についての説明を併せて依頼することとしました。

3月9日（土）、本陣資料館の講義室にて泉田先生と都市計画課夏目主査の講演を行い、駒屋への移動の道中で整備計画に基づいて改修された民家などを見学という流れです。

泉田先生は現在、東日本大震災で甚大な被害を受けた気仙沼市で建築文化財の復原の総合監修をされていて、文化財単体の復原のみならず、再利用計画やまちづくり、都市計画へとかかわり、さまざまな提議をされていること、財源など復興への道程は難しく長いこと、民間団体よりの寄金などで計画が進展しそうな光が見えてきたことをお話されました。建築文化財は保存・展覧のみならず、文化財であることの誇りとともに、価値あるものとして現在に利用されることも住民のためになり、まちづくりの一環であることを主張している、この基本的な考えに賛同される事業主などが多くなることを望んでいるとのことでした。このような社会的な意義を主張し、啓蒙することの重要さを痛感します。

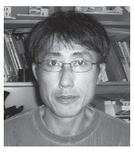
また「駒屋」復原改修について、普請の歴史、建物の特徴、調査のこと、技術の進歩による仕様の違いなどを推察し判断することなど詳細な説明をしていただきました。二川のまちなみの特徴について、江戸時代の宿場町の顔と近代の製糸業で栄えた町の顔があり、近代の建築の評価が世間的にはなされていないとの懸念があることも言われました。過去を省みると、さまざまな歴史の積み重ねがあり、現在の志向もあり、改めてまちなみの形成は安易なものではないと思えました。

夏目主査の講演では、平成19年にまちづくりに関して住民活動が活発化していた二川町から地区指定され、住民主体で大学、行政と協同する形で景観形成の取り組みがスタートし、平成22年に大岩町の一部まで拡大したこと、整備計画を平成21年に策定したことなどの経緯、現在までに助成・助言した18件の改修など実績の説明がありました。市の支援の基本的な考えとして、条例・協定であまりしばりを設けず、ゆるやかに誘導することを旨としていることを強調されていました。また、住民団体が主体となって行っているまちづくりの活動、「二川宿まち並み通信」の発行や修景・緑化・美化活動の紹介もしていただきました。

道中、改修事例をいくつか紹介いただきながら駒屋へ向かいましたが、江戸時代に旅籠があった場所の民家に、その旅籠の表示を表札風に掲げたり、さるぼぼ？などの吊り飾りを各家の軒に下げるなど、まちづくりへの住民の意気を感じることができました。

現場では、泉田先生と監理者である伊藤建築設計事務所の澤村喜久夫氏の詳細な説明を交え見学させていただきました。主屋は、屋根の野地が一部竹編み、小屋梁が細割で意外と華奢につくられているなど特徴があり、さまざまな面から推察をし、どのように復原していくか実物を見ながら説明をいただきました。離れ、蔵、瓦などの特殊な工法、特徴も説明していただきました。

30分ほどオーバーしてしまいましたが、参加者の皆さんは時間など気になさらず、真剣に、また興味深く見学されていました。



山本敏彦｜一級建築士事務所
シーエスデザインオフィス

講演会の様子

まちなみの改修事例の説明を聞く

05_アーキテクト.indd 10　13.4.19 5:07:22 PM

鉄筋コンクリートの補修、劣化、保護を学ぶ

今回の建材研修会は「RC構造物のメンテナンス　補修・劣化及び保護について」というテーマで3月8日（金）に行った。講師は、三重地域会賛助会員である㈲モリケンの河野哲哉氏と東海コンクリート診断士会会員の竹内祥一氏である。

まず、コンクリート診断士というのは、日本コンクリート工学会が設けた資格制度である。コンクリート構造物を永年にわたって維持していくために、コンクリートを診断し、補修・補強する技術を持った技術者を養成するために設けられ、診断士試験に合格し有資格者となっている方は全国に10,000名以上活躍されているとのことである。

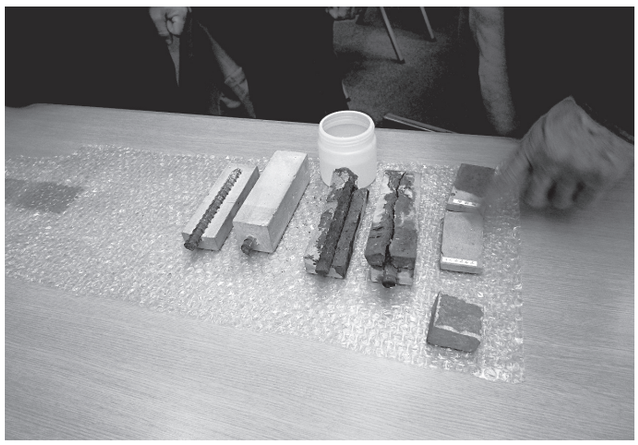
ご存じの通り、コンクリートが劣化することは悪いことではない（ここでの劣化とは、強度低下のことではなく成分変化のこと）。劣化によって中の鉄筋を腐食させることが最も懸念される事象である。一般にコンクリートの劣化には、次のようなものがある。「中性化」「塩害」「アルカリシリカ反応」「凍害」「化学的腐食」「疲労」「風化・劣化」「火災」。慣れ親しんだ？単語が並んでいるが、説明の中で気になったのは、この中で「アルカリシリカ反応」だけは現在は直す方法がないということだ。「アルカリシリカ反応」とは、骨材に含まれるアルカリシリカ反応性鉱物による反応で、コンクリートの異常な膨張を引き起こす現象である。使用する骨材の品質確保に注意することを改めて認識させられた。その他の劣化事象については、それぞれ対策工法が存在しているので、どのような工法を用いれば良いか説明いただいた。いずれにしても劣化原因の推定を的確に行うことが重要であるとのこと。

劣化補修材として浸透性吸水防止材「アクアテクト」という製品を説明していただいた。これはコンクリートに浸透して撥水効果、遮塩性を発揮し、長期の耐久性、耐候性を持続するケミカル材であり、塗布後は外観変化がなく、美観を長期に保持する製品とのこと（塗布の有無による鉄筋腐食の進行の違いが分かる写真が下である）。ただし、浸透厚は2～3㎜なので、これも永久的なものではない。定期的なメンテナンスおよび補強のタイミングは、対費用効果をどこに設定するかによるとのこと。

現在、新耐震基準（昭和56年）により建設された建物でも築30年を超える時期に入った。コンクリートに要求されているかぶり厚さの進行年から想定すると、当時建設された建物は、理論上の中性化は鉄筋位置までの間隔のすでに1/2を超えて浸食している。そのような状況に対して世の中の考え方は、国土交通省がまとめた既存建築物ストック統計報告書の中に述べられているように、「つくっては壊す」というフロー消費型の社会から「いいものをつくって、きちんと手入れして長く大切に使う」というストック型社会へ動いていることは明らかである。コンクリートの寿命を延ばす、また、寿命を回復させるために有効に効果が発揮できる補修材が進化開発されることは、我々、ずっと建築をつくってきた者にとって、非常にありがたいことだとつくづく感じた。

西出　章｜森永建築設計事務所

研修会風景



鉄筋への浸透性吸水防止材塗布の有無による違いが分かる

05_アーキテクト.indd　11　13.4.19　5:07:22 PM

伊豆長岡 三養荘にて

本部理事・東海支部長　鳥居 久保

全国支部長会議が2月1日、2日の2日間、静岡県の伊豆長岡（2005年に伊豆の国市）の三養荘で開催された。支部長会議はおおよそ3か月ごと、全国10支部の持ち回りで開催されており、2012年度は7月に九州支部で博多、10月には沖縄支部で那覇において開催されている（沖縄のレポートは「ARCHITECT」1月号に掲載）。過去2回はいずれも初日に会議を支部事務局で開催して2日目がエクスカーションの設定であった。東海支部が開催当番となった今回、名古屋栄の支部事務局で会議をするのではなく、2月の厳冬の折、激務の合間を縫って集まってもらう価値のある、ここ三養荘をあえて会場とした。

三養荘は、伊豆長岡の古奈地区、狩野川のほとり42,000坪の敷地に40棟の客室が点在する旅館である。もともとは、旧三菱財閥の創始者岩崎弥太郎氏の長男久彌氏の別邸として京都の庭師小川治兵衛の手による日本庭園の中に数寄屋造り（書院風数寄屋といったほうが正しいか）で建築された。その後、旅館「三養荘」として15棟で営業が始められ、昭和63年には隣接していた白石館を買収して村野藤吾の設計による新館がオープンし、現在に至る。旧三菱財閥・岩崎別邸を本館、村野藤吾が設計したほうを新館と呼び、明治時代の東京市長後藤新平氏の田舎屋も移築された。

庭園にはもみじや松、しだれ桜やどうだんつつじ、2月には梅がそろそろといった風情の中、15時より10支部長全員と小田義彦、松本敏夫両副会長、地元静岡から尾林孝雄地域会長、大石郁子監査、高島ゆかりさんを加えた15人で、本館の「老松」にて支部長会議が開催された。

議題は各支部での10月以降の活動報告と、規程類の制定の進捗状況の報告である。

北海道支部ではこの秋に札幌でJIA全国大会が予定されており、これが当面の大きな活動目標となる。全長97mに及ぶ札幌駅地下コンコースの壁面を利用しカタルニア建築展も企画している。

東北支部は東日本大震災以降、復興活動を直接的に行ってきた関係者（市民、行政、大学、研究機関、民間企業、建築家など）に声をかけて、復興に向けた取り組みを多角的に発表するシンポジウム（※4月6~7日に仙台で開催）の予定を報告した。

関東甲信越支部からは、東京都との懇談の場として、JIA、事務所協会、士会3会の構成による建築会議を新設したことが報告された。また、賛助会との懇親、交流会を積極的に行っていることもあわせて報告された。

北陸支部では、JIA石川建築大賞の報告がなされた。審査の第1段階は会員投票、最終審査は市民投票という方式を取り、地元の新聞でも広報された。また、石川では行政に設計入札をプロポーザルへと移行する要請をし、入札の場合でも最低価格を設けるよう、四会で各市町村に陳情した。

東海支部ではJIA東海住宅建築賞が新たに事業化されたことを報告。また、支部大会として昨年度10月に「JIA東海大会2012in伊賀」を開催し、コミュニティアーキテクトとして伊賀市庁舎の保存運動に地元が大きくかかわり、成果を上げた様子を報告した。

近畿支部では、文化財などの保存を当局に対して要請する中で、法的な訴えをするも結果が思うように出ない事例が続き、弁護士会との連携の重要性を実感したという。

中国支部では専業設計事務所協会があり、あわせて五会で防災に関する事業に取り組んでいることと、広島でプロポーザルを実施し、その結果について冊子にまとめることを予定しているという。

四国支部では、支部大会を今年から開催することにしたとのこと。第1回「JIA四国支部大会in愛媛」を、愛媛県松山市の道後で2月28日に開催することとした。

九州支部では北九州市と韓国とで、地元を巻き込んでのまちづくりワークショップを行っている。また、会員サービスの一環として支部に顧問弁護士を置いた。これは会員のための契約のアドバイス、監理料トラブルなど諸々の業務的な解決の方策としてだという。

沖縄支部では業界紙に連載してきた「建設論壇」が最終回を迎えた。支部長が執筆し、素人が読んでも分かりやすい記事にしているとのこと。また建築8団体の新年会の幹事を担当し、500人以上の参加があったと報告された。

以上、要約であるが、これだけでもJIAが全国組織としていかに広範に地域や広域とつながりを持って働きかけているかがうかがわれるし、支部、地域会が持つ固有の活動原理こそがJIAの活動の源であることが分かる。

一方で、本部的な重要事項としての支部規約類の制定準備がある。支部による活動が広範で多岐にわたっている現状と、単一会としてシンプルにまとめあげるための規程・規約類の整備こそ、JIAの特性と本質をよく表している現象だと思う。4月からの公益社団法人化を前に、公益寄与、公益保護を打ち出す中、社会的にその立場が担保されたうえで、地域からの信頼をもとに深く浸透していく建築家の職能性に、改めて思いを強くした会議であった。

紙面の都合で三養荘への思いが伝えきれないが、支部長のメンバーが理事会で顔を合わせると、いまだにこの日の話題が出て懐かしい思いがこみ上げてくる。それは三養荘というすばらしいシチュエーションのおかげであったことは間違いない。

会議の様子

05_アーキテクト.indd 12　13.4.19 5:07:23 PM

東海4県の学生対象

第20回 JIA 東海学生卒業設計コンクール 2013

6月1日、公開最終審査と座談会「卒業制作を問う」

第20回の節目を迎え、特別企画として従来の記念講演会に代え、座談会を行う。テーマは「卒業制作を問う」で、コーディネーターは審査員長である古谷誠章氏。審査員、過去の受賞者（3名）を交えて、これまでの卒業制作との比較で感じていることや、今後の卒業制作へ望むことなど、学生へのアドバイスや意見交換を行う。

●審　査　員（敬称略・すべてJIA会員）　古谷誠章（委員長／早稲田大学教授・ナスカ一級建築事務所）、鈴木幸治（ナウハウス）、廣瀬高保（中建築設計事務所）、山田高志（山田高志建築設計事務所）、川口亜稀子（Liv　設計工房）、植野收（石本建築事務所）

●賞　　金　賞1点、銀賞2点、佳作数点

●展　示　会　建築家の日（6月15日）の関連行事として5月28日（火）～6月9（日）応募作品および入選作品の展示会を名古屋都市センター「まちづくり広場」（名古屋市中区金山　金山南ビル11F）で行う。

●公開最終審査・表彰式・講評会・20周年記念座談会

6月1日（土）　名古屋都市センター「まちづくり広場」（大研修室）にて。座談会テーマは「卒業制作を問う」。

●問　合　せ　JIA東海支部JIA東海学生卒業設計コンクール特別委員会事務局（〒460-0008　名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル5F　TEL：052-263-4636）

東海4県につくられた住宅対象

第1回 JIA 東海住宅建築賞 2013

6月15日公開審査

愛知県・岐阜県・三重県・静岡県の東海4県で最近3年以内につくられた住宅（専用住宅・集合住宅など）を対象に、各自が定めたテーマに対して特に秀でた住宅の施主、設計者、施工者に賞を贈る。

●主　　旨（抜粋）　現代建築に求められるのは、制度や経済に合理的なだけの建物ではなく、個々人の感性に訴える日常的な空間ではないか。東海における居住空間の質およびデザインの向上に貢献すべく、プログラム・空間構成・ディテール・環境への配慮・工法などさまざまなテーマの中から優れた住宅を募集する。

●審 査 方 法　第1次審査（公開）　6月15日（土）名古屋大学ES総合館ESホールにて応募者全員がコンセプト発表～同日結果発表。第2次審査は7月に現地審査、同月末入賞発表予定。

●審　査　員　横河健（日本大学教授・横河設計工房）、伊藤恭行（名古屋市立大学教授・CA n（C+A名古屋））、藤原徹平（横浜国立大学大学院准教授・フジワラボ）（敬称略）

●表　　彰　大賞1作品、優秀賞2～3、奨励賞2～3。
大賞と優秀賞には記念品贈呈。表彰式は8月に行う。

●問　合　せ　JIA東海支部事務局（〒460-0008　名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル5F　TEL：052-263-4636）

木、環境、エネルギーを学ぶ

木の家スクール名古屋 2013

受講者募集

「木の家スクール名古屋2013」が6月1日開講します。日本の地域材を活用した家づくりなどを学ぶ講座です。定員は50名（申込先着順）で受講料15,000円（資料代含む）。申込みは「木の家スクール名古屋」で検索、「受講申込」からお願いします。　（宇野勇治／JIA愛知）

■講義内容（いずれも 講義は13:30～15:10と15:20～17:00）

○第1回：6/1（土）

辻 充孝（岐阜県立森林文化アカデミー講師）
第1部「省エネ法とはなんだ？ 1次エネルギーを計算してみよう」
第2部「結露はなぜ起きる？ 仕組みがわかれば怖くない」

○第2回：7/27（土）

舩岡正光（三重大学大学院生物資源学研究科教授）「分子に刻まれた時を読む 森林からはじまる新しい持続的社会を目指して 」
山下保博（アトリエ・天工人主宰、建築家）「建築家のスケール」

○第3回：9/28（土）

池辺潤一（『藤野電力』発起人、本業：自然住宅の設計士）
「『藤野電力』市民がつくるエネルギー」
バルテンシュタイン（工学博士、エコライフラボ事業統括責任者）
「自然エネルギーで自己完結する家を作ろう」

○第4回：10/12（土） フィールドワーク　※詳細は別途連絡
滋賀県湖東地域の森とkikitoの取り組みを訪ねる
田中一則（湖東地域材循環システム協議会＆一般社団法人kikito事務局長）ほか「山の現状、森林を循環できる仕組みづくり」

○第5回：11/10（日）

安井 昇（桜設計集団主宰、建築家、木造防火研究者）
「地震に強く、火にも強く、環境に優しい木造住宅の実践例」
安藤邦廣（筑波大学芸術学系教授、建築家）
「板倉の技術開発と震災の復興」

■会場

名古屋工業大学（JR 中央線・地下鉄鶴舞駅下車徒歩約8分）

05_アーキテクト.indd 13　13.4.19 5:07:23 PM

JIA リフレッシュセミナーに参加して

2013年３月３日（日）から５日（火）まで、
熱海においてJIA リフレッシュセミナーが開催された。
東海支部から参加した３名の方の感想を紹介する。

会場となった「熱海リフレッシュセンター」の前で記念撮影

セミナーの様子

グループ別に分かれて討議

グループ発表の様子

プロフェッションとしてやるには、どうやるか

今年に入って、記憶に残るイベントが二つあった。ひとつは、建築家内藤廣による倫理研究所富士高原研究所の見学、もうひとつは、先日急逝された写真家二川幸夫による「日本の民家 一九五五年」と題された展覧会である。

日頃、木造建築の設計に携わっているものとして、どちらも衝撃的な感動を覚えた。建てられた年代こそ違いはあるものの、金物を使わない木組みの美しさとそれによって構築される空間の迫力は、見るものを惹きつけてしまう魅力があった。

こうした体験を胸に抱きながら、リフレッシュセミナーに参加した。今回のテーマは「クリエイティブな空間と構造」ということで、佐々木睦朗氏と稲山正弘氏の二人の構造家から貴重なお話をいただいた。両者とも個性的な取り組みをされているなと感じたのだが、私はどうしても前出のことが脳裏に焼きついているからなのか、後者の稲山さんの仕事に興味を持った。稲山さんは、小住宅から大空間の木造建築まで多様な仕事をされているが、与えられた条件に対してさまざまな角度から検討し、それを実践に移すということを常に行っているチャレンジャーである。中でも、国産のスギ、ヒノキの製材を105角程度の小断面を用いて組んでいく考え方は、とても新鮮であった。しかも、その構造材は定尺（MAX6m）をプレカット加工し、金物は極力使わないで地元の大工が現場で施工していくというのだ。これを聞いて、私は確信した。

2人の構造家の話を受けて、参加者が4～5人のグループに分かれディスカッションを行った。最終日に発表する私たちのグループテーマは、「プロフェッションとしてやるには、どうやるか」というものだったが、私は、地場についての課題を投げ掛けてみた。地場の製材を使用するにあたり、川上と川下の想いが共有できていなかったり、安定供給をするための乾燥技術が伴っていなかったり、材の調達に時間が掛かるため納品が間に合わなかったりということが、実際現場では起きている。今後はこれらを解消できるように努力しつつ、さまざまな構造表現を学んでいきたいと感じた。それには、自分ひとりではなく多くの仲間による人組みと、自らがブレナイ姿勢を貫く大切さを忘れないことが肝心であるということも…。

村松　篤｜村松篤設計事務所（静岡）

05_アーキテクト.indd 14　13.4.19 5:07:24 PM

宝のような時間、多くの出会いに感謝

リフレッシュセミナーに参加してきました。予想はしていましたが、行ってみたら北は北海道、南は沖縄に至るまで全国各地の会員が集結しており、まことにバラエティに富んだ集まりとなっていました。

会期中に二つの構造セミナーが行われ、一つは佐々木睦郎氏、もう一つは稲山正弘氏によるものでした。佐々木氏は鉄やコンクリートを駆使して今までに見ることがなかったような自由な空間をつくられます。稲山氏は木造による空間を専門とし、特に普通の住宅で使われるような構造部材で大空間をつくることに情熱を傾けていらっしゃいます。まことに好対照なお二人でした。

佐々木氏のお話から、いろいろな出会いがあって現在の作品に結びついているのだということが分かりました。特にフェリックス・キャンデラに出会い、そこからガウディを見るようになり、それが、せんだいメディアテークにつながっていくという件はとても印象深かったものです。夜になって酒の席となり、佐々木氏に直接語っていただけもして、まさに宝のような時間を過ごさせていただいたものでした。

一方、稲山氏の構造には佐々木氏のような派手さはないといっていいかもしれません。しかしながら先に述べたように住宅部材でつくれる大空間というのは、聞いていて偉大なブレークスルーのように思いました。おそらく日本の中であればどこであっても、地場の部材で、地場の大工さんで大空間をつくることができるからです。しかも金物をほとんど使われないことからローコストでさえあります。建築の可能性はまだまだあるのだと目からうろこの思いがしました。

このセミナーの後、グループに分かれて発表をする場が予定されていました。何を発表すべきか悩んだものですが、グループ内のとある方の発言に助けられました。とてもユニークな方で、自分はエレベーターのある物件はつくらないと言われました。人間というのはそこまで機械を必要とせずとも生きていけるはずだと。聞いて不思議な感銘を受けたものです。続いて、それなら自分はプラスターボードは使わないとほかの方がおっしゃられ、建築の身体性について話は盛り上がりました。書きたいことはまだまだありますが、紙面の都合でこの辺で。

多くの出会いに感謝しています。

竹中アシュ｜竹中設計事務所アシュ（愛知）

得るもの大きいグループディスカッション

JIAリフレッシュセミナー、どんなことが待ち受けているのか、ちょっと謎めいたセミナーと聞いていました。セミナー会場には、見知らぬ人たちばかり、全国の支部から総勢28名のセミナー参加者です。たった3日間とは思えない、充実した時間が過ごせました。

講師として、構造デザイナーの佐々木睦郎先生と稲山正弘先生を迎え、各々の先生が構造デザインをする上で、日頃考えていること、これまでのこと、これからのことを、実作を例にお話していただきました。佐々木先生は稲山先生の講義の後に、稲山先生の木構造は自分とは無縁の世界とは言っていましたが、「FLUX STRUCTURE」の延長線上に木造の自由曲面との葛藤を期待します。

講義を聞いて感じたことを、グループ別にまとめるという課題です。そして、この、グループに分かれてのディスカッションが、このリフレッシュセミナーの本旨ではないかと思われます。我々のグループは、北の北海道支部、南の沖縄支部、近畿支部、四国支部、そして私の東海支部と地方色豊かな多様なメンバー構成、5人のグループとなりました。

各グループの発表では、佐々木先生と稲山先生の挑戦し続けるという共通点を見出し、「あ、ぼくたちのマニフェスト」と自分たちのマニフェストを発表するグループ。「佐々木睦郎VS稲山正弘　徹底比較論」を展開したグループ。「プロフェッションとしてやるには、どうやるか」、2人の講師から受けた刺激を今後の自分たちにどう生かすかと発表するグループ。そして、我々のグループは「3.11以降の建築家の作法」と銘打って、北海道から沖縄まで、地方の建築様式、生活様式の相違点や共通点を織り交ぜ、各地方の建築家のあり方、構造設計家だけによる構造設計ではなく、我々建築家がコンダクターとして牽引していくことの大切さを発表しました。

このグループディスカッションは、短時間ではありましたが、非常に濃い時間に感じました。講師の先生の講義も大変刺激的なものでしたが、グループディスカッションで地方ごとの話が聞けたこと、テーマについて、グループで意識を共有できたことは、今後の自分にとってとてもためになりました。このようなセミナーには、もっと若い人たちにどんどん参加してもらいたいと思いました。

平野恵津泰｜ワーク○キューブ（愛知）

05_アーキテクト.indd 15　13.4.19 5:07:25 PM

岩手三陸被災地の現状と活動

「自立再建住宅」と「災害公営住宅」の一体化を 漁村集落特有の住まい方を継承し再生めざす

JIA 岩手地域会会長　建築舎・アトリエＲ　六本木 久志

東日本大震災から2年が経過した。岩手県の海岸線延長709kmに点在する沿岸部の町や漁村集落は壊滅的な被害を受け、今なお約4万人が仮設住宅などでの生活を強いられている。津波浸水の被害を受けた家屋や学校、漁業施設などは撤去され、町や集落の名残は一掃されてしまった。海辺の空き地では災害廃棄物(瓦礫)がうずたかく積み上げられ、分別のための重機は唸りをあげ、ダンプカーの往来が慌ただしい。

復旧、復興の動きや事業は行政ベースでは着実に進行している。被災地の瓦礫の処理は、やっと30％程度と報じられているが、他都道府県の広域処理の協力を得て、平成26年3月末完了を目標に進めている。道路や橋、鉄道などのインフラ整備を筆頭に集団移転用地の確保、災害公営住宅、土地区画整備事業など、住宅再建に関する事業が動き出し、一部工事発注する地域も出始めている。一方で仮設住宅に住む被災者の意識調査による日常の生活回復度では「やや回復」が45％、「あまり回復していない」と感じる人が半数であり、日常の生活はだいぶ回復してきているものの、今後や住宅再建などについて「将来の見通しが立たず不安を抱えている」といった現状を表している。

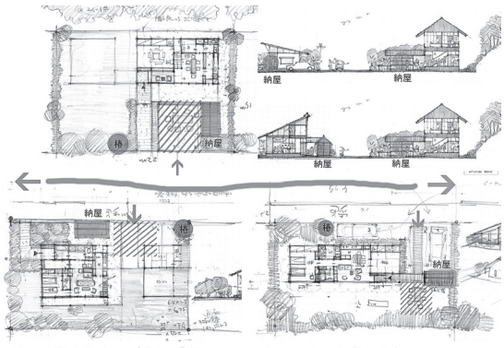
仮設住宅は同じ集落単位で構成されている団地と、離れ離れになってしまった団地とがあるが、ともに慣れない生活に戸惑っている。三陸沿岸の集落の多くは漁村集落で納屋の作業場や漁具倉庫を必要とするなど、地域特有の住居形態を持っており、また漁業者同士の特有な近所づきあい、コミュニティを形づくってきた。コミュニティ単位で防災集団移転(高台移転)の認定を受けた集落では自立再建住宅を目指す世帯と、経済的な理由で災害公営住宅に入らざるを得ない世帯が混在している。災害公営住宅を提供する側の行政には漁村集落の実情に合わせた施策が求められるが、その多くは多集落混在型の共同公営住宅を原則として進められている。このような現状に対し住民からは自立再建住宅と戸建ての災害公営住宅と一体となった計画を求める声が上がっている。

2011年12月からJIAも一員の専門家集団「災害復興まちづくり支援機構」が岩手県大船渡市碁石地域振興協議会（碁石復興まちづくり協議会）への支援を続けている。「支援機構」は弁護士、行政書士、技術士、学識経験者などで構成されており、毎月一度は開催される協議会に同席し、生活や高台移転などの住民相談会などを開催している。JIA岩手地域会では第1回協議会から参加し、4月13日には第18回目を迎える。まちづくり協議会住民による大船渡市との幾度にも及ぶ折衝や熱意によって、高台移転用地の取得と災害復興住宅の戸建方式が市によって決定された。碁石地区の全世帯は津波によって家や田畑を失ったが、生活には切り離せない海の見える高台を選択し、新たな集落の再生に挑んでいる。

自立再建世帯15世帯と災害公営住宅世帯6世帯の小規模なコミュニティの再生計画となるが、昨年12月より日本大学「糸長研究室」＋JIA岩手地域会「建築家集団・リアスの風」が住宅部会担当となり「碁石地区高台移転住宅団地」計画の移転予定地の調査や、「再生・活性化に向けた意識調査」「各世帯の家族構成調査」などのアンケート調査をもとに住宅モデルプランのワークショップ開催など活動を続けてきた。今、各世帯の住まいづくりの提案と話し合いを繰り返している。住民全員が参加し、豊かで生き生きとした集落の再建「みんなで創る碁石復興まちづくり計画」が一歩一歩動き出している。

JIA 岩手地域会による高台移転用地調査

第 16 回碁石地区復興まちづくり協議会



復興住宅のモデルプラン「椿と瓦屋根の納屋のある家並み」

05_アーキテクト.indd 16　13.4.19 5:07:25 PM

福島を訪れて

住宅相談支援で見えた現実 短期計画より「暮らし」に重点を

JIA 愛知　Liv 設計工房　川口亜稀子

東日本大震災から2年の歳月が過ぎた頃、住宅の相談支援として福島県を訪問しました。震災後から1年ほどは、ニュースなどの映像で東北の被害状況を見ていましたが、以降は情報も少なくなり、正直なところ意識も薄らいでいました。少しでも前進した復興の現状を見ようと仙台空港から町へ向かうタクシーから外を見ましたが、そこには津波で壊滅した土地に雑草が生い茂る荒れ地がずっと続いていました。

がれき処理は進んでいるものの、いまだ復興が形に現れていない風景を見て、震災と津波被害の甚大さを改めて痛感しました。防波堤をつくる計画や土木工事が進んでいることで、すれ違うのはダンプカーばかり。ダンプカーが連なる風景は異様であり、海岸沿いにずっと続く防波堤の建設は気が遠くなりそうな事業だとため息が出る思いでした。訪れた支援地の役場から海までの2kmの間も津波で何もかもなくなっており、やはりダンプカーが行き交い、がれき処理を行っていました。

震災前は線路や駅があり、街道沿いには建物が並んでいたのでしょうが、基礎だけが残された町中を歩くと、古代遺跡を彷徨っているような錯覚に見舞われました。復興計画では、津波被害にあった場所は海岸公園や魚市場として再開発を行い、住民は内陸や高台に新たに住宅地を整備し移住する予定となっています。

町役場の復興推進室からの依頼で、被災住宅のセカンドオピニオンとしての住宅相談支援を2日間2回行い、合計で６組の相談者の話を伺いました。助けることができなかった家族やペットへの痛恨の思い、故郷や財産を失った喪失感、2年経過してやっと顔を上げ言葉に出せるようになった方々からのお話を伺うことで、地震直後から今までの状況が切に伝わってきました。

被災者向け復興住宅のための造成が急ピッチで行われており、今年中に200件以上の住宅の宅地ができる予定です。地権者から土地を購入し、山や丘を削って区画整理を行い、道路やライフラインも整備して、被災世帯へ100坪までは借地として無償提供を行うなど、被災した各市町村で行っている復興事業は国の負担も大きく、相当な費用を投じていることを実感しました。

同時に200件以上の住宅を一つの町に新築する市場が、それも各市町村単位で進められていますが、住民の方々にはまず広告宣伝など情報発信力の強いハウスメーカーやビルダーの展示場を訪れ、計画を進める方が多いように見受けられます。建築関係の知り合いがいる場合以外では、近くの工務店や設計事務所へ依頼する窓口が目立たなく、検討する机上に上がっていない動きが見え残念に思いました。

100～150坪以上の自然豊かな土地で生活していた方々にとって仮設住宅での生活は窮屈でストレスも多く、少しでも早く家を建てて移り住みたい思いで過ごされていることはとても理解できます。しかし、個性のない画一的な住宅地になってしまうことを想像すると、短期計画で事業を進めるのではなく、その場所の風土を生かした復興地域づくり、暮らしづくりに重点を置くことはできないのだろうかと考えさせられました。

また「間取ができれば家が建つ」と思われている方が多く、「間取り」のほかに、通風や採光、断熱、材料、構造など見えない部分の設計も大切なことや、家が建つまでの全体の工程、工事費の見積書の見方、業者の選定など知っていただきたいこともあったのですが、１時間強の相談時間では足らないことを痛感しました。

今回はまだ土地が見えていない時期での住宅相談だったので相談者も実感が薄く、10月に造成が終わり居住者へ提供される工程の中で、再度相談会の機会を得ることができればと町役場へ意見しました。そのときにはもう少し踏み込んで、住まいづくりの情報提供や、マニュアル冊子などを用意して住民へ渡せるなどできればと思っています。

「百聞は一見にしかず」。実際に訪れて震災の被害を目の当たりにし、進まぬ復興、これからの地域づくりのあり方についてなど、意識を高めることができました。いつ起こってもおかしくない東海・東南海地震に備え、建築士として何ができるかを考えるきっかけとなりました。

基礎を残し、荒れ地となった被災地

すれ違うのはダンプカーばかり

05_アーキテクト.indd　17　　13.4.19　5:07:26 PM

一宮市の丹下作品、価値を再確認

「墨会館の価値と見所」講演会・見学会・展覧会

谷　進 | タクト建築工房
愛知県建築士事務所協会一宮支部

墨会館 外観

見学会の様子

「墨会館」は、日本有数の染色整理企業であった㈱艶金興業の社屋として、丹下健三氏設計により1957年に竣工しました。広島平和記念館、旧東京都庁舎、香川県庁舎と、代表作を次々と世に送り出すその狭間に誕生した墨会館は、丹下氏のエッセンスが凝縮されています。2008年、国の登録有形文化財となり、その後艶金興業の事業縮小により2010年12月一宮市が購入、地元公民館に再活用されることとなり、2013年度に改修工事が行われます。オリジナルの「墨会館」を見る最後の機会となるため、その価値を再確認しさらに魅力を引き上げるよう改修されることを願い、見学会・講演会・展覧会を開催しました。2013年は丹下健三氏生誕100年にあたります。墨会館の新たな門出を祝す、そんな想いをも込めた愛知県建築士事務所協会一宮支部主催の企画です。

見学会：登録文化財の調査と所見を担った愛知工業大学野々垣篤准教授の解説により見学会を行いました。当時使われていた丹下氏デザインの家具を現在も使用するという所有者の支援により、椅子とテーブルを見学会会場と展覧会会場に置くこともでき、丹下建築をさらに深く体感することができたと思います。1950年代の丹下建築のデザインと墨会館の位置づけ、そしてその特徴であるデザインの解説の後、実物を見て・触れて・感じてと、丹下建築を心ゆくまでお楽しみいただけたと思います。

講演会「丹下健三と50年代の建築」＋対談：明治村館長で青山学院大学の鈴木博之教授による講演会と、早稲田大学の石山修武教授との対談が行われました。広島市平和記念会館から墨会館前後に至るまで、さらに大坂万博お祭り広場、新東京都庁舎と抜粋して丹下作品とそのデザイン思想の変遷について鈴木教授が分析され、墨会館の位置づけと意匠の特徴の解説がありました。墨会館のデザインは多くの丹下建築にも見られるものの、墨会館に似た建物はほかになく、完成度が高く今後さらに注目される建物のようです。石山修武教授との対談では、墨会館の空調設計を担当した川合健二氏を通しての墨会館と艶金興業が語られ、さらに両教授より墨会館のデザインについてほかの丹下建築との比較、はつらつとして格好がよい50年代建築の時代の共通性が語られました。質疑応答では、この名建築をごく普通の公民館活動にどう使っていくべきかが問われ、鈴木教授より地元建築家グループとの話し合いの場を持つことが有効との助言がありました。

展覧会：(2月26日～3月3日)。艶金興業とはどんな企業なのか。丹下健三氏とはどんな建築家なのか。墨会館の設計の経緯。川合健二氏とは何者か、そして石山修武氏とのかかわりは。また、当時、一体成形合板の技術を持つ㈱天童木工と丹下氏を含む建築家たちとの家具デザインのコラボレーションと墨会館の家具の紹介。艶金興業所有時の登録文化財となった頃の写真、当時の設計図・家具図。補修用のテラコッタタイル・陶板、さらに当時使われていたテーブル・椅子・灰皿も並べられ、実際に座って資料を眺められるよう会場を設えました。県外からも訪れてくださった多くの皆さんに、墨会館をさらに深く理解いただけたのであれば幸いです。

講演会の会場の様子

鈴木教授（左）と石山教授

展覧会会場

展覧会会場に置かれた丹下氏と天童木工のコラボによる机といす

05_アーキテクト.indd 18 13.4.19 5:07:27 PM

「建築計画の実践を通じて得たもの」

名古屋大学大学院教授 谷口元さん（JIA会員）の最終講義を聞いて

谷村　茂｜アール・アンド・エス設計工房

左｜谷口元教授　右上｜講義の様子　右下｜花束を受け取る谷口教授

3月18日（月）、名古屋大学ESホールのスクリーンにはユネスコ世界遺産San Gimignanoのスライドが映し出されていた。17時ちょうど、二人の教授からの谷口元教授の業績紹介後、最終講義が始まった。

私はもちろん、彼の正式な講義は聞いたことはないので何をしゃべるのか興味津々で、「医療・福祉中心で回顧的な講義を書生っぽく、112枚のスライドを使って行う」との話し出しで、やはり真面目な講義なのだと納得した。

まず、同世代の人たちには懐かしい、動線・軸線という計画で使用された語句の話があり、『A Pattern Language』『The Hospital』『A History of Building Types』という本の名前が出てくると、そういえば昔読んだよな、と学生時代を思い出させられた。知らなかったのは、パリ・セーヌ川河畔のノートルダム寺院の横に建っていたHotel-Dieuという修道院を転用した病院が焼失し、実現しなかった再建案がベンサムの唱えるPanopticon（監視塔概念）の影響を受けていたとということである。

続いて、Prison Architectureのスライドで監獄と病院の類似性を説明し、ナイチンゲールが病院改善のヒントを得た野戦病院のプランから始まり、アメリカの大学病院などを例示しつつ、増殖（成長、拡大）する仕組みがモダニズム建築の特長であることを示した。

クラスター理論で、病院の中に拠点を分散して、治療・看護の労力を減らすと同時に監視しやすくする経緯がいくつかのプランで示され、いかに医療過誤を失くすかの歴史が紹介された。面白かったのは、Michigan Univ.の大学病院を例にとり、このような設計をするAIAの建築家は必ず理論立てをして計画を行うという事実だった。

ついで、自分自身の設計経験に移り、「鶴舞再開発計画（名大病院）」での苦労話、旧大学病院の外来施設のお粗末さを前に、どのように計画を進めていったかを簡単に説明した。もう一つの大きな仕事は、1995年から始まった「名古屋大学キャンパス・マスタープラン」へのかかわりで、現在大きく変わりつつある建物群の紹介から30年後のキャンパスの想定図（その中では図書館は地下に埋設され、表層は豊田講堂から続くグリーンベルトで覆われる）がパースで紹介された。

最後に、建築分野の最大の問題として強調したのは、「川上から川下への一方通行」であり、現状は目標から外れても一方通行でフィードバックがなされにくいことで、設計や工事の分離発注を害悪のひとつであると指摘した。特に病院建築、学校建築においては、環境性能の検証を行い、絶えざるフィードバックを行うことが大切で、建築家の職能としての自覚も必要であるとの指摘はまさにその通りであると思う。

今後、彼は2年間をマネジメントの特任教授という立場で、達成途中のプロジェクトや後継者育成を行い、退職後、フリーハンドの立場でマスタープランの描けない病院の手助けを行い、Panopticonの逆を行うとのこと。

75分の講義の終了時に2人の女子学生から花束の贈呈を受けていたが、そのうちの一人は昨年わが事務所にインターンシップで来ていた中国人留学生であった。

最終講義を聞きながら、私は自分のState Univ. of NY卒業式の最終講義で、名誉教授のDr. R. Buckminster Fullerがニコニコと笑いながら話していた顔を思い出した。

＊最後に、ここでのスライドは通常の講義で使われたものだとの説明があったが、展開が早くてついていけない箇所もあったので、私の聞き間違いがあるかもしれないことを記させていただきます。

05_アーキテクト.indd 19　13.4.19 5:07:28 PM

保存情報　第138回　JIA愛知保存研究会

データ発掘（お気に入りの歴史的環境調査）　蟹江の古民家・黒川邸

母屋

蔵

茶室

■発掘者のコメント

蟹江・黒川邸。私の知人、元ウクライナ大使の大学教授黒川祐次氏の実家で木造2階建ての住宅である。戦国時代にあった蟹江城址の近くにあり、母屋とその付属屋と蔵からなっている。母屋、付属屋は江戸末期から明治元年までには建てられていたらしい。座敷など一部は昭和初期に手が加えられていると聞く。茶室・水屋は見事なものであり、2階への階段は当時の民家としてはモダンなものである。

蔵は、名古屋の堀川端での材木商所有であったものを昭和初期に移築したものである。堀川端では当然、昭和初期以前には建てられていたはずであるから、案外古いものであるかもしれない。小屋裏などを綿密に調査すればいつの時代かは判明するのではないかと思う。

現在、医師の長男、次男である黒川氏、長女はそれぞれ東京や海外などで生活されており、この実家にはご高齢のご母堂1人が住んでおられるが、手入れもなかなか行き届いている。また、ご母堂の佐屋町の実家は有形登録文化財に登録されており、古民家保存についてのご家族の理解度は高い。ちなみに、この民家は蟹江町の「古い町並みと集落・酒蔵」の最初に掲載されている。

このような木造の古民家は各地で次第に少なくなってきており、何らかの手立てを考え保存されることが望ましい。

所在地：愛知県海部郡蟹江町城2-161
構　造：木造2階建て
築　年：一部江戸後期

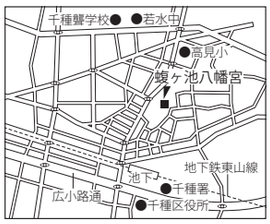
國分孝雄｜国分設計

データ発掘（お気に入りの歴史的環境調査）　蝮ヶ池八幡宮

飛地境内社（龍神社・弁天社）

蝮ヶ池八幡宮　入口

蝮ヶ池八幡宮　本殿



■発掘者のコメント

地下鉄池下駅ができた頃に比べると、池下界隈の様子は随分と変わってきている。変わってないのは以前から気になっていた蝮ヶ池八幡宮と駅近くの小さな飛地境内社。蝮という名称も尋常ではないし、通りから続く石段も気になるものの、何となく行きそびれていた八幡様を訪ねることにした。

訪れる前に、千種区役所で町名の由来を調べると、地下鉄池下駅から東にかけて蝮ヶ池という大池(縦180間、横60間の2haで、池下駅と厚生年金会館跡)があり、この池は末森城の真西、または、ここから真西に名古屋城があるので「真西が池」が転化したのか、とある。別の由来では、この池の周りは蝮が多かったので、「蝮ヶ池」と名付けられたともあった。事実、池下から大久手にかけては、とにかく池や沼が多かったようである。

大正10年、千種耕地整理組合が発足し、翌年から池の埋め立てが始まったが、事故が相次いだため、池の底であった箇所(飛地境内社)に「龍神社と弁天社」を祀って工事安全を祈願しているようだ。私もかつて池下で住宅を設計した折に、あまりにもひどいボーリングデータに驚いたことがある。

飛地境内社(龍神社と弁天社)の小さな社から北に数分歩くと、うっかりすると見逃すような幟が立った導入口と、それに続く数十段の石段を登りきった丘に「蝮ヶ池八幡宮本殿」がある。私が訪ねた3月中旬はまだ寒く、境内には訪れる人も少ないようで、住宅に囲まれた境内は大木に囲まれて静かであった。

境内の由来には、今から300年以上前、徳川初期の寛永年間に造営されたとある。御祭神は第15代應神天皇で、昭和20年の空襲で社殿を消失したが、昭和26年に新たに社殿が落成し、盛大な遷座祭が行われている。昭和49年には伊勢神宮のご神木を造営用材として下賜されて末社社殿が造営されている。

所在地：名古屋市千種区向陽1-3-32
創建：寛永10年（1633年）
参考資料：名古屋市千種区役所町づくり推進係「千種区の町名の由来」
千種区高見学区連絡協議会「歴史」

谷村　茂｜
アール・アンド・エス設計工房

05_アーキテクト.indd　20　　13.4.19　5:07:30 PM

減少下げ止まり、会員5,000名目指す

本部理事・副会長　小田　義彦

第210回理事会は、2月21日（金）13:30～18:30、22名の理事（1名欠席）と2名の監事、3名の次期理事（オブザーバー）、事務局3名の出席にて開催した。

【審議事項】

1) **入退会者承認**：21名新規入会（東海1名）、23名退会（東海2名）、2名休会が承認され、4406名となった。（事務局説明）

2) **後援名義承認**：9件を承認した。（筒井専務説明）

3) **入会申込書書式について**（西勝総務委員長）：正会員申込書（4月1日使用開始）は本部で統一するが、準会員および協力会員申込書は本部作成の雛形をアレンジして各支部が作成、本部で確認する。正会員書式は、アンケート調査の項目削除、登録支部の欄挿入など、一部を訂正することで承認した。準会員書式について一部の訂正の後、承認され、これを基に各支部で独自に作成する。準会員・協力会員の会費は6月の本部総会で正式承認のため、準会員募集はそれ以降となる。

4) **新会員規程の軽微な修正**（上浪規程類制定特別委員会会員規程WG主査）：内閣府公益認定等委員会からの指摘の通り、会員規程第3条（一）正会員の「定款及び建築家憲章に賛同し、倫理規定・行動規範（ガイドライン）の遵守を誓約する者で」を「定款及び建築家憲章・倫理規定・行動規範（ガイドライン）の遵守を誓約する者で」と訂正することを承認した。

5) **建築アーカイヴス会議WGによるNPO法人設立と業務移行について**（仙田満アーカイヴス議長）：KITとJIAが結ぶ協定書の中のJIAの役割である、資料収集への協力の役割を新しく立上げるNPO法人に移行（再委託）することを承認した。新法人名は「特定非営利活動法人建築文化推進機構」とする。ただし、KIT－JIAの2者間の協定でなく、KIT－JIA－新NPO法人の3者間に改めるべきであろう、との注文が付いた。

6) **ベルコリーヌ対策会議解散の件**（森対策会議議長）：一応の結果を見たので会議を解散する、との提案を承認した。

【協議事項】

1) **支部規約、地域会規約、地域会規則について**（小田規程類制定委員会委員長）：3つの規約類について共通確認事項の説明があった。①専門会員・シニア会員の会費と会員サービス（会報誌・会員証の配布などは今後協議）は全国一律とし、権利・義務は支部ごとに異なって良い。②準会員・協力会員の入退会・会員管理は原則支部が行うことを明記すべき。③支部規約は理事会承認、地域会規約と地域会規則は支部および地域会総会の議決で改廃できることなどを確認した。4月12日は理事懇談会のため、5月7日の理事会で10支部の支部規約を承認する。それまでに支部総会で決議する場合は、理事会承認を前提とする旨、支部に周知する。10支部長には本日配布資料の訂正された支部規約を確認し、問題点・確認事項を至急本部に送ることを要請した。

【報告事項】

1) **災害時におけるJIAの支援活動の円滑化に関する実証訓練報告**（庫川災害対策委員長）：2012年11月18日に近畿支部にて、近畿支部・四国支部 災害対策委員および本部災害対策委員が連携して実施。東京湾北部を震源とする、M7.3、震度6強の地震を想定した訓練を行い、今後の課題を明瞭化できたと報告した。大幅なファンド不足も訴えられた。

2) **中央建築士審査会の行政処分者について**（筒井専務）：正会員5名中、3名は職責委員会送りとしない。2名は問題ありとして職責委員会へ送られる。

3) **会員種別変更に関する事務処理について**（事務局）：協議の上理事会決定した。

①2013年度内につき、正会員からシニア会員への移行を希望する者は、これを認め年会費は18,000円とする。

②2013年度内につき、退会した人がシニア会員として再入会を申し込んだ場合は、既会費納入履歴を確認の上、入会を認める。

③2013年3月31日までの休会申込みは、認める（1年ごとの更新、3年まで）。休会のシステムは残し、会員種別内規または、会費規程附則として整備する。

④退会は、3月31日提出分までは会費未納があれば受理せず、4月1日以降は会費未納でも受理せざるを得ない。（新会費規程）未納分は残存債務として請求し続ける。

4) **会員増強および新会員対応特別委員会報告**（道家委員長）：2013年度は65名減少と下げ止まった（毎年は192名減少）。2013年6月まで増強委員会を存続する。5,000名を目指す。

5) **2013年度総会および理事会・理事懇談会の日程**：総会は6月28日(金)を予定、理事会は各月開催（集合会議・委任状は無効）で調整中。

6) **JIA全国大会開催地について**：2014年度は中国支部、2015年度は北陸支部にて。

その他の報告（筒井専務理事）

①公益目的事業管理システムを構築中。契約当事者、支部長・地域会長の代理執行権限などについて、副会長＋専務理事にて協議中。いずれ報告する。

②従来行っていた新年度から総会までの暫定予算措置は理事会承認していたが、新法人認定以降は、その執行権限者は会長となる。

05_アーキテクト.indd 21　13.4.19 5:07:30 PM

東海支部役員会報告

私にとっては久しぶりに東海支部事務局に来て１年目のこの日が、公益社団法人移行直前の役員会となりました。4月1日からの移行は確定となり、本部・支部・地域会のラインが整備されたものと思います。支部規約・地域会規則は、細則などで決めなければならない幾つかの課題はありますが、ほぼ整いました。今後は会員へ共通の認識を持ってもらうための啓発活動が重要になると思います。また、新しくできた会員種別は会員の若返りと会員増強に結びつくものであると期待できるので、これに力点を置くべきだと考えています。

尾林孝雄｜静岡地域会

日　時：2013年3月22日（金）16:00 ～18:30
場　所：昭和ビル5階　JIA東海支部会議室
出席者：支部長、理事、幹事10名、監査2名、オブザーバー4名

1. 支部長挨拶

2. 報告事項

(1) 本部報告

①第210回理事会（3/19）　※理事会レポート参照

②総務委員会（3/14）（服部）

【審議事項】

・ 正会員用、準会員用の各申込書のひな形を討議。正会員用はFAX、携帯電話欄を設ける。興味ある分野を聞く欄を定款4条を基に調整する。専門会員、ジュニア会員用は、推薦者欄に「推薦人は申込者に対して入会後の交流支援を行う」と記載する。

【協議事項】

・ 給与規定、退職金、就業規則について／支部については、本部委員会で取捨選択のできるひな形を作成し、それに基づき各支部で規定類を整備する。

・ 3月末日まで現行ルールで入会を受け付ける。

【報告事項】

・ 準会員、協力会員の入会手続きは、7月受付開始、8月始動。

・ 今後の休会の扱い、廃止。

・ 来年度から理事会は2カ月に1度の開催にし、開催しない月はWEBで理事懇談会を行う。入退会審査は2カ月に1度になる。

③広報委員会・全国支部広報委員長会議 第12回（3/12）（江川）

全国各支部報告

・ 東海：「JIA東海住宅建築賞2013」スタート。

・ 会員勧誘パンフレット作成に本部のひな形がほしいとの意見がある。

・「東海学生卒業設計コンクール2013」は20周年記念事業企画となり、予算枠を広げての開催とする。

WGなど報告、検討

・ WEB広報WG：公益社団法人移行、新たな会員制度に絡む修正内容。本部支部のHP共通ルールの明示を早くしてほしい。

・ メルマガWG：3月末に、本部メルマガ第1号を配信予定。本部メルマガに載せたいものは中澤氏宛に、CCにて鈴木委員長に。

・ 市民向けリーフレットWG：2013年度版改訂～法人名変更、写真の差し替え、4/6 ～7の東北支部震災シンポジウムに間に合うように。今後市民リーフレットは、各支部の要求枚数に基づき配付予定。

・ 資格制度WG：横浜全国大会で行われたシンポジウム「建築家資格制度の目指すところ」のまとめは建築家資格制度の「これまで」と「これから」としてvol.5にて発表される。JIA紹介リーフレット新バージョンは6月頃に発送できるように考えている。

④建築家資格制度委員会第119回（2/22）・第120回（3/21）（鈴木祥司）

・ 2月7日資格等認定制度懇談会が開かれた。JIAは資格制度委員会WGのメンバーで参加。

・ 支部建築家認定評議会報告と議事／ポートフォリオの入れ替えの必要性はあるが、認定時のものは残し新しい資料を追加する必要あり。

・ JIA-MAGAGINEで資格制度の広報。Vol.5以降を継続発行。

(2) 支部報告

①増強委員会（3/22）（石田）

現在の東海支部入会目標達成率28.7％を50％以上に3/31までに達成したい。各地域会に任せ、目標の達成に努力をお願いする。

②資格制度委員会（3/7）（鈴木祥司）

細則9条1（108単位以上）による更新者8名。細則9条1（90単位以上）による更新者49名。細則9条3（24単位以上）による更新者2名。細則9条3（20単位以上）による更新者29名。計88名（内書類不備者2名）

③支部建築家資格制度認定評議会（3/16）（鈴木祥司）

更新せず、および単位不足者18名。議長より9条の1更新者、9条の3更新者の合計88名は審査用件を満たしており認定する発言があった。

(3) 各地域会からの報告（各地域会長）　省略

議事

1. 審議事項　入会申込み「寺下浩」（岐阜・長尾）　承認。

2. 協議事項

①2013年度通常総会議案書　（水野＋服部）

・ 第１号議案2012年度事業報告・第2号議案2012年度決算報告、監査報告・第3号議案東海支部規約改定の件・第4号議案東海支部役員選出規約改正の件

・「規約」を「規定」に「規則」を「規約」に 訂正する。

・ 議案の内容について　第1号議案：一部訂正があり、は次回に確認。第2号議案；来期決算のために新新会計で予算案を作っておいた方がよいとの意見があった。

②東海支部運営細則

・ 準会員についての規則がないので、取り決めが必要である。

・ 慶弔規則、旅費規則も東海支部にはなかったので、記載する。

05_アーキテクト.indd 22　13.4.19 5:07:30 PM

東海とっておきガイド㊹ | 静岡編 |

鈴木　武

不戦の誓い、鎮魂の塔

静岡市清水区（旧清水市）に昭和34（1959）年3月、西南の役から第2次世界大戦までの戦没者と戦災殉職者4356柱の霊を祀った忠霊塔が完成した。

建設地は駿河湾三保半島の付け根、駒越地区。高低差18mの小高い丘“迎山”。ここからは富士山、清水港、三保の松原から伊豆連山を一望することができる。既往の忠霊塔と異にし、“迎山”全体を聖地と計画したスケールの大きさ、尖塔の洗練されたデザインは神社の千木を表現したといわれている。塔の下には三味線のバチ形デザインの碑が静かに置かれている。設計者はなんと！近代数寄屋の創始者・建築家吉田五十八。氏と忠霊塔設計のかかわり、経緯は？　興味は尽きないが今は知るすべがない。

忠霊塔公園：静岡市清水区迎山町2081-1

清水で唯一 本マグロを扱う定食屋

清水港はマグロの水揚げ日本一。由比漁港は目下サクラエビ春期漁の真っ最中。春風とともに港は活気づいている。そんな清水に住んでいても、家庭でいつも旨い刺身が食べられるわけでもない。欲求不満が募ると跳んでいくのが「魚福」さんである。東名高速道清水インターを出て、国1を東に1～2分、黄色の外装が目印で、店内には遠方からのお客さんも目につく。魚屋さんから興した大将ならでは、本マグロにこだわっている。店の大人気は「本マグロ・ミックス定食」で、大トロ・中トロ・赤み、3つの味の違いを一挙に満喫でき1,800円。圧倒的に男性客が多い中、女性の人気メニューが「盛り合わせ定食」1,500円。付け足しのマグロフレークが懐かしく、ご飯がついついすすみます。

魚福：静岡市清水区西久保19-1　TEL 054-364-8421
営業時間11：00～14：00　17：00～19：30　月曜定休（火・水の夕方なし）

地域会だより

＜静岡＞

3/5　静岡地域会規則検討委員会
　　細則等の実務に必要な資料の整備について協議
3/28　臨時役員会・総会準備会議
3/28　臨時運営役員会「総会準備会議」
4/8　監査
4/15　役員会　総会資料の最終確認
4/24　通常総会・記念講演会・懇親会
　　記念講演会講師：金箱温春氏「構造設計の役割と可能性」

＜愛知＞

4/1　建築八団体連絡会会議
4/23　海外建築研修報告会
　　「ドイツ・スイス・イタリア」の環境建築を巡る旅
　　事業委員会
4/26　役員会
5/10　役員会・総会 ＜同日 JIA東海支部役員会・総会＞
5/18　素材を訪ねる旅 「左官」
6/1　JIA東海学生卒業設計コンクール　公開審査
　　会場：名古屋都市センター
6/15　JIA東海住宅建築賞　公開審査
　　会場：名古屋大学ES総合館

＜岐阜＞

3/14～「ぎふ建築・生活・芸術系学生・生徒優秀作品展」
3/20　（建築学会主催、JIA岐阜地域会共催）
　　3/14（木）14:00～3/20（水）17:00
　　3/16（日）12:00～14:30（審査および講評会）
　　15:00～16:30（講演会）
　　場　所：てつめいギャラリー
　　講　師：入江経一氏（IAMAS教授）
　　テーマ：「20世紀から21世紀への建築と社会」
4/24　通常総会

＜三重＞

4/12　第1回役員会（総会準備）
4/20　通常総会・記念講演会・懇親会

05_アーキテクト.indd 23　13.4.19 5:07:32 PM

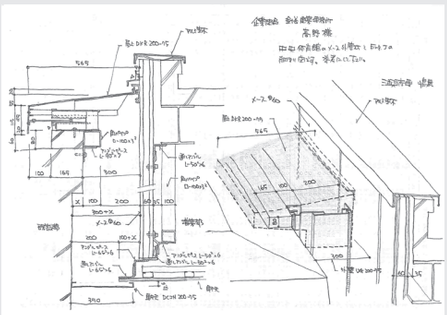
賛助会通信 ⑥

私の営業はフリーハンドで始まった

嶋尻 行雅｜三興商事㈱代表取締役社長

私が20代後半から仕事でお世話になっている設計事務所の所長と食事をした際、「あなたが若い頃に打合せをしたとき、フリーハンドの絵が上手だったので仕事を出そうと思ったんですよ」と言われ、本当にうれしかったことがあります。

当時、私が担当したEXP. Jは非汎用品だったため、一通りの商品説明や私の下手な営業トークでは相手に通用しませんでした。どうしたら自分の営業に興味を持ってもらえるのか考えた末のアイディアがフリーハンド図面でした。ある建築フェアでお客さんの１人から「何人かの設計士さんと話をしたけど、何かできそうな設計士さんはささっと家の全体像を絵に描いてくれるよね」という言葉を聞き、そのようなフリーハンドの絵を描いて見せれば私に興味を持ってもらえるのではないかと思い、ひたすら練習しました。打ち合わせのときは宿題として一度持ち帰り、次回訪問の際に技術提案としてフリーハンドで描いた詳細図、納まり姿図を提出しました。カタログに印刷してある図面も、あえてフリーハンドで描き直し提出しました。そうしたことから先生方と私との二人三脚の関係が始まり、今日につながったのだと思います。



12～13年前に書いたフリーハンドの図面

営業は「見られている」と意識することで仕事に対する姿勢が高くなり大きく成長します。さらに「魅せたい」意識になれば、個をもっと成長させてくれると思います。私ども三興商事㈱は建築家の皆さんにとって、技術サービスのできる良きパートナーであることを願っています。JIA静岡の会員の皆様をはじめとするたくさんの皆様に支えられながら、クライアントに夢を与え、地域社会に貢献できる企業として邁進していきますので、これからも応援よろしくお願いします。

●三興商事㈱
〒422-8041　静岡市駿河区中田1-5-3
TEL 054-283-1181　FAX 054-284-0751

編集後記

●新年度を迎え、北朝鮮問題や原発汚染水問題で慌ただしい毎日ですが、JIAも新しくスタートし、建築業界にも大いなる夢と希望を持った方々が多数入られたのではないでしょうか。そうした皆さんには設計の素晴らしさや、業界の厳しい現状を少しでも理解していただくために、「ARCHITECT」を読んでいただきたいと思います。

先日、私自身がこの道に進むきっかけとなった建築（京都御所・二条城・東寺）を見る機会があり、夢を抱いて飛び込んだ時代を改めて思い起こさせてもらいました。日本の木造建築が好きな者にとって、大変楽しみな連載が今号からスタートします。中部大学工学部建築学科講師・石山央樹先生による「日本人と木材」隔月6回の連載です。石山先生、どうぞよろしくお願いします。　（西川光広）

●私事で恐縮だが、先日法事の折、御住職と震災の話になり、住宅の耐震化がなかなか進まないことについて、仏教の無常観の立場から「成るようにしか成らない」という話をされた。耐震化の進捗問題には日本の庶民に根付いたこの無常観が深く影響を与えていると思う。世界に冠たる地震・津波国、火山国、モンスーン地帯である日本ではさもありなん思想であるが、仏陀本来の必然性の洞察・知恵と慈悲の思想からすれば、分かっているのに無用な苦痛を衆生が受けるというのは大いなる不条理であろう。

本号の名大・村山氏の減災都市計画に関しての記事の「レジリエント」（すぐに立ち直れる・回復力のある）や、岩手の六本木氏の災害地の住宅復興におけるコミュニティー再建の取り組み、家族のあり方の変遷、コンクリートの劣化の問題の記事…どれをとっても「諦念としての無常観」を乗り越え「生きる力・知恵」として常ならざるものの洞察を要請しているように思われる。無常観もまた無常なるもののようだ。　（前田佐智男）

ARCHITECT
第296号
発　行　日　2013.5.1（毎月１回発行）
定　　価　380円
発行責任者　鳥居久保
編集責任者　吉元　学
編　　集　東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
建築ジャーナル内
ARCHITECT 編集部
名古屋市東区泉 1-13-35
CSC HISAYA BLD.
TEL（052）971-7479　FAX 951-3130
発　行　所　（公社）日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄 4-3-26　昭和ビル
TEL（052）263-4636　FAX 251-8495
E-Mail：shibu@jia-tokai.org
http://www.jia-tokai.org/

05_アーキテクト.indd 24　13.4.19 5:07:32 PM